平城京跡から盛唐期の唐三彩

奈良市西大寺南町

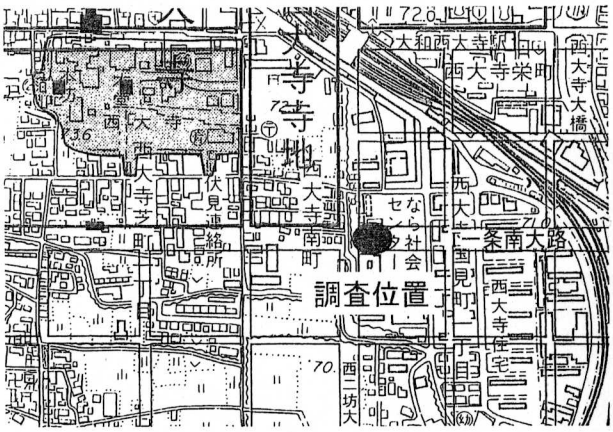
奈良市では昭和63年度から、西大寺駅南地区で区画整理事業に係る調査を継続して行なっています。今回の調査地は、奈良時代には「一条南大路」という、平城宮佐伯門から西へ延びる幅約24mの道路が通っていた場所にあたります。この調査で、日本の出土例としては数少ない「唐三彩」と呼ばれる陶器が出土しました。

唐三彩が出土した遺構　この調査では奈良時代の道路、溝、平安時代以降の井戸跡、土坑、柱穴などの遺構が見つかりました。唐三彩が出土したのは２条見つかった奈良時代の溝のうちの１つで、幅1.5m前後、深さ0.6m前後で東西に延びています。この溝は一条南大路の北縁を流れていた溝（北側溝）と考えられます。唐三彩はこの溝を埋めた土から出土し、８世紀中頃の須恵器（杯・高杯・壺など）と土師器（杯・高杯・皿・甕など）を中心に、奈良時代～平安時代初め頃の須恵器、土師器、黒色土器、土馬、瓦、塼などもこの溝から出土しました。

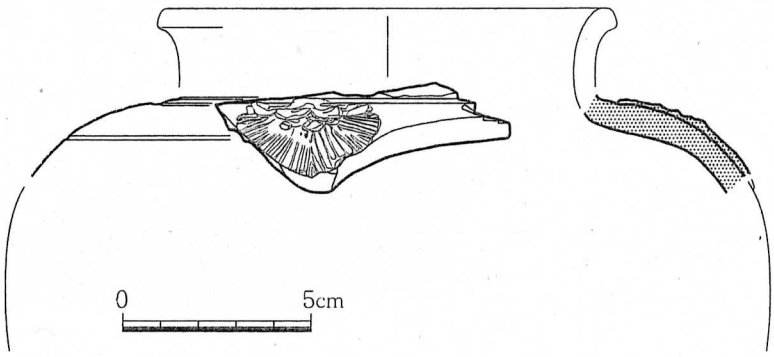
なお、一条南大路北側溝と考えられる溝のさらに北側に、約1.5mの間隔で並行するほぼ同規模の奈良時代の溝も見つかっており、その溝は当時の宅地内に掘られた溝で、これら２つの溝の間に道路と宅地を仕切る塀があったと考えられます。

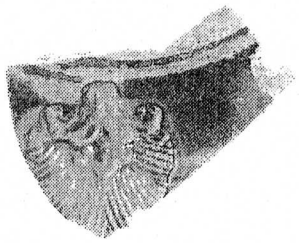
出土した唐三彩　北側溝から出土した唐三彩（唐三彩施釉陶器）は縦約５cm、横約7.5cm、厚さ約0.7cmの破片で、壺形陶器の頸部から肩部にかけての一部分とみられ、諸特徴から三足炉（三足壺、鍑）の一部と考えられます。表面には植物をモチーフにした４cm大の文様が立体的にあしらわれています。この装飾は「貼花文」と言い、型押しした厚さ１～２mmの薄い板状の文様を貼り付けたものです。デザインは唐代に好まれた「宝相華」と呼ばれる華麗な花文で、シルクロードを通じて西方との交流があった唐代の文化をよく物語っています。釉薬の発色が良く、白釉の上に施された緑釉と褐釉との三色が鮮やかな色合いを織りなす、唐三彩の優品といえます。

この唐三彩は、胎土や製作技法から、唐の都の洛陽にほど近い黄冶窯（現・河南省鞏義市）で盛唐期の８世紀前半に製作されたものとみられ、当時の日中間の文化交流を端的に示す重要な遺物であり、平城京の国際性を物語る貴重な資料です。



調査位置図（1/10,000）





唐三彩三足炉図・写真（1/2）

唐三彩と奈良三彩　三彩とは、２種類以上の色釉（緑釉・黄褐釉・白地透明釉・藍釉など）を器の表面に染め分けした鉛釉陶器です。中国の唐で作られた三彩を「唐三彩」と呼び、唐三彩の影響のもとで、奈良時代に日本国内で生産された三彩を「奈良三彩」と呼びます。

唐三彩は、中国の唐の時代を代表するやきもので、明器と呼ばれる、墓への副葬品として使われましたが、日常生活用具としても使用されており、今回出土の唐三彩も、中国内外で流通するものであったことを裏付けています。

日本で出土する唐三彩は、出土地点にして50例程度が知られます。その多くは、陶枕と呼ばれるものですが、枕として使用したかどうかについては諸説あります。奈良市内では、平城宮跡、平城京跡、大安寺旧境内から、出土地点にして10例程度が知られています。

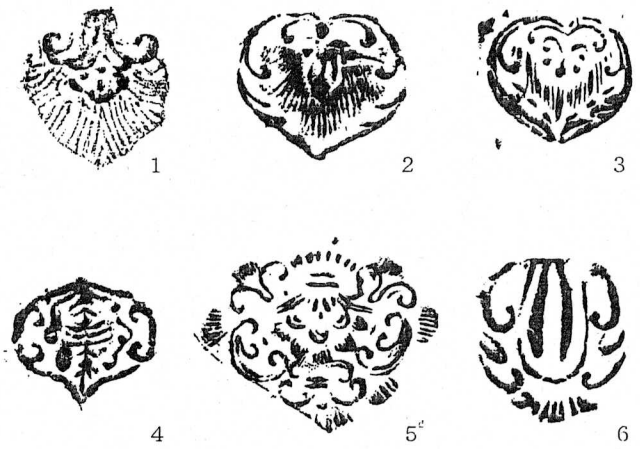
また、国産の奈良三彩は、８世紀初めころに生産が始まりますが、どこで生産していたかはまだわかりません。出土する奈良三彩は、唐三彩の器形を模したものはなく、金属器を模倣した器が多く見られます。特に薬壺形の大小の壺は数が多く、主に寺院跡や祭祀遺構から出土し、大型壺は蔵骨器として出土する場合もあります。なお、正倉院には、奈良時代の三彩陶器が伝わっていますが、これらはすべて奈良三彩です。

さて、唐三彩と奈良三彩との違いは、一般に、形態、発色、施釉技法、素地の胎土、化粧土の有無、などから判断されます。しかし、日本では三彩の多くが小さな破片で出土することから、判断が難しいものもあります。

緑・白・黄褐に彩られるだけでなく、ガラスのような輝きのある唐三彩、奈良三彩は、当時、最も華やかな土器でした。当時の人々は、きっと他の土器とは異なった特別の扱いをしていたと思われます。

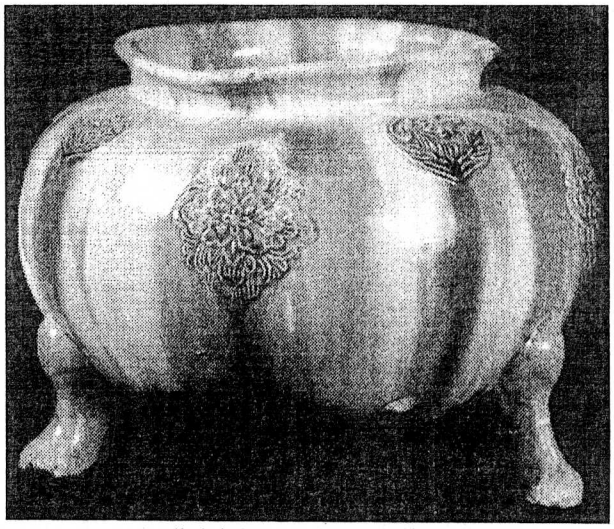
貼花文装飾　唐三彩の三足炉には、肩部に貼花文と呼ばれる装飾を施したものがあります。この貼花文装飾は、三足炉のほかに長頸壺などにも見られます。貼花文装飾には、人物や動物、植物を題材にしたものがあります。今回出土した唐三彩の貼花文装飾は、宝相華と呼ばれる架空の植物を題材としています。宝相華は当時の仏教装飾によく見られる文様です。なお、日本出土の唐三彩のうち、貼花文装飾があるものは、福岡県太宰府市大宰府跡（観世音寺）、同宗像市沖ノ島祭祀遺跡についで３例目ですが、平城京跡では初めてです。

三足炉　今回出土した唐三彩は、三足炉と呼ばれる形態で、三足壺、鍑とも呼ばれます。獣脚３本を器底部に均等に配した薬壺形の壺で、香炉や火舎として使用されたと考えられます。今回出土した唐三彩を焼き上げたとみられる中国河南省の黄冶窯の製品としては、一般的な形態とみてよいでしょう。



（1は今回出土、2～6は中国出土例）

貼花文装飾（1/2）



黄冶窯出土の三足炉（約1/2）

（１以外は河南省鞏義市文物保護管理所『黄冶唐三彩窯』より）

発行　奈良市教育委員会　平成19年８月